

2023年4月23日（日）主日朝礼拝説教

『心が燃える』井上隆晶牧師

I ヨハネ 2 章 28～3 章 3 節、ルカ福音書 24 章 22～35 節

①【聖書が見えてくる】

イエス様が復活した日曜日に、クレオパとルカという二人の弟子がエマオという村に向かって旅をしていました。エマオはエルサレムから西へ約 11 キロ離れた村で、昔ユダ・マカバイが異教徒と戦った時、神が勝利を与えた村です。彼らがエマオに向かったのは、彼らが強いメシアを期待していたことの象徴に思えます。彼らが「私たちはあの方（イエス）こそイスラエルを解放して下さると望みをかけていました。」（21 節）と語っていることから分かります。彼らは深い絶望感を抱いて、エルサレムと兄弟たちを後にしたのです。そこへイエス様が旅人の姿で近寄ってきて彼らと一緒に歩き始めたのですが、彼らの目は遮られていてイエス様だとは分かりませんでした。イエス様が「歩きながらやり取りしているその話は何のことですか」（17 節）と聞くと、二人は暗い顔をして立ち止まり、イエス様が殺されてしまったこと、墓には遺体がなかったこと、天使が現れ「イエス様は生きています」と言ったことなどを話しました。そこでイエス様は弟子たちに「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか」といわれ、「モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、ご自分について書かれていることを説明され」（25～27 節）しました。「モーセとすべての預言者から始めて聖書全体」というのは、旧約聖書のことです。つまり旧約聖書の中に予言されている、ご自分の受難と復活について説明をされたのです。聖書は確かな目的があって書かれています。それはキリストを証しするということです。

●カリストス・ウェアは「キリストは聖書の最初の一行から最後の一行まで、全体を縫い合わせている糸のようなものです。」と言っていますし、アレキサンドル・シュメーマンは「クリスチャンというのは、眼を注ぐ所にはどこにでもキリストを見出し、そのキリストのうちで喜びにひたることができる存在だ」といいました。

あるプロテスタントのクリスチャンに「世界を創造し、アダムとエバを創造し、エデンの園を歩き、モーセに語りかけたのはイエス様ですよ」と言ったら、その人は「えっ、知らなかった」と言われました。イエス様がユダヤ人に「あなたたちは聖書（旧約）の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが聖書（旧約）は私について証しをするものだ。それなのに、あなたたちは命を得るために私のところへ来ようとしなさい。」（ヨハネ 5：39～40）と言われたことがあります。ユダヤ人と同じような読み方をしているのです。詩編 71：17 に「神

よ、私の若い時から、あなたご自身が常に教えて下さるので、今に至るまで私は驚くべき御業を語り伝えて来ました。」とある通り、結局、神に教えてもらわなければ人間は聖書を理解することはできません。神から出たものは、神でなければ解き明かすことはできないからです。エマオの旅人はイエス様に教えてもらったからいいけれど、現代の私たちはどうしたら良いのでしょうか。答えは聖霊です。イエス様は「真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。」（ヨハネ 16：13）と言われましたし、ヨハネは「あなたがたの内には、御子から注がれた油（聖霊）がありますから、誰からも教えを受ける必要がありません。その油が万事について教えます。」（1ヨハネ 2：27）と言っています。聖霊が聖書の意味を教えてくれるのです。

②【イエス様が見えてくる】

やがて彼らは目的の村に着きますが、イエス様は「先へ行こうとされる様子だった」（ルカ 24：28）と書かれています。主はご自分の体である信徒を捜し求めて歩かれます。決して彼らを「みなしご」にはなさいません。他の弟子たちにも語りかけ、集めようとしたのだと思います。二人は「一緒にお泊りください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」（29 節）と無理に引き止めました。あなたがイエス様に「共にいてほしい」と願えば、主はあなたと共にいてくださいます。「一緒に食事の席に着いた時、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。」（30～31 節）とあります。「パンを取り」「賛美の祈りを唱え」「裂き」「渡す」この四つの動作は聖餐式と同じです。説教では弟子たちの目は開きませんでした。聖餐式で彼らの目は開きました。何に目が開いたのでしょう。「イエスだと分かった」とありますから、イエス様に向かって目が開いた、イエス様が誰であるのかが分かったということです。イエス様が単なる人間ではなく、決して死なない神の命を持っている方であると分かったという事です。ここまで行かなければ力になりません。説教も人の心を燃えさせますが、キリストが分かるためには聖餐でないと駄目です。聖餐式でパンとぶどう酒が体の中に入ると「私の中に神の命が入って来た」と分かるのです。もっとも確かなものは神です。人間など確かではありません。その神と一体になるので、確かにされるのです。このキリストと一体となる経験が必要なのです。

●赤木善光という東京神学大学で教会史を教えていた先生がいました。彼は礼拝についてこんなことを書いています。「私たちはやはり礼拝時にキリストがその全能の力をもって体をもって会堂に満ちていたもうことを堅く信じるべきです。もしそうでないなら、私たちは聖日の朝、わざわざ肉体を教会堂に運んできて礼拝に出席する必要はなく、自宅でラジオの宗教放送を聞くなり、机の上で説教書を読んでいけばよいということになります。…教会の礼拝は決して牧師の説教を聞くために来る場所ではありません。むしろキリストを体験するため

に来るところです。…キリストの体にあずかる経験、または自分がキリストの肢体であることの経験という意味です。」さらに「われわれは聖餐によって天上に引き上げられ、キリストご自身と神秘的に合体するのです。…近代プロテスタントは聖餐において我々はキリストご自身にあずかるのだという最も大切な事が見失われ、キリストの救いの結果にのみにあずかるかのような誤解が生まれています。」と述べています。

③【新しい出発点】

彼らの目が開くと、イエス様の姿は見えなくなりました。見えなくなったということは、イエス様というお方は、彼らが操作できない方、すなわち神であることを示しています。二人は「聖書を説明して下さった時、わたしたちの心は燃えていたではないか」(32 節)と語り合い、すぐにエルサレムに引き返しました。それは彼らが再び信仰の旅を始めたことを表しています。イエス様の聖書講義を聞いて、神には失敗はなく、神の救いの歴史は着実に進んでいるのだと知り嬉しくなったからです。説教と聖餐という礼拝には人生を U ターンさせる力があります。地へ落ちてゆく私たちを、天へ引き上げる力があります。

●私は教団の中にあるホーリネス系の教会で洗礼を受けました。聖めを重視する教会です。でも酒を飲むな、煙草を吸うな、夜の街に行くな、という道徳的な教えばかりで、いくらそれを守っても心も行いも清くなれませんでした。聖会に行き、罪を告白し「清くなったと信じなさい」と言われても信じる事が出来ず、自分は信仰が弱いんだと思い、自分を責め、信仰が分からなくなっていました。そんな時、友人に連れられて正教会に行ったのです。そこで司祭が至聖所から持って来た聖杯を見た時、涙が出てきて「これこそ唯一聖なるものだ、どうしてもこれを飲みたい」と思いました。そしてイザヤ書 6 章にある、イザヤが祭壇の炭火を唇に触れられたら、罪が清められた個所を思い出しました。それを礼拝後に神父に言うと、「それは祈禱文に載っています」と言われ驚きました。私は自分の力で頑張って聖くなろうとしていたのです。でも私を聖くするのはキリストだけだということが分かったのです。それが分かった時、心が軽くなり、ものすごい喜びに溢れました。私も礼拝で目が開き、変わったのです。

●藤井孝夫という牧師さんが面白いことを書いています。聖書を読んでいると、途方にくれている人に対してキリストの共通したことが一つあるというのです。「イエス様は言うべき言葉をお持ちであったということである。…その言葉とは『オソレルコトハナイ』『コレデオシマイデハナイ』という一言であった。…あらゆる手だてがもうなくなっている。みんながサジを投げている。が、イエスにお会いすることで、その場が新しい出発点になった、そういうことが起こっていると聖書は報じている。…そのことを驚きと喜びをもって伝えている。」

「イエス様に会った人は、その場が新しい出発点になる。」本当にそうだと思います

す。ここにおられる皆さんもそういう方が何人もおられます。イエス様と日々出会い、新しい出発をする者とさせていただきます。